

# カナダの2020年前後の青少年向けメンタリング運動に関する考察

## A Study on Youth Mentoring Movement in Canada around 2020

渡辺 かよ子

Kayoko WATANABE

### 1. はじめに

本稿は、パンデミックとそれからの回復期にあって、青少年の健やかな未来に向けた運動拡大に注力しているカナダのメンタリング運動の現状と課題について、MENTOR Canadaが2021年に発表した三種の報告書の内容分析を中心に、その概要を報告しようとするものである。

青少年向けメンタリング運動は、①メンタリングの効果に関するプログラム評価、②円環的生涯発達支援としてのメンタリングの理論的妥当性に関する研究、③メンタリング・プログラムの費用対効果の観点からの政策的妥当性を論拠に、米国を中心に「先進」各国の各々の社会事情や文化的文脈の中で強力に推進されてきている<sup>1</sup>。

カナダの青少年向けメンタリング運動は、米国から多くを学びつつ、米国同様、BBBS (Big Brother Big Sister)を中核に着実な発展を遂げてきている。カナダのBBBS運動は、1913年当初、米国の支部としてトロント地区で活動を開始し、1964年にBBBSC (Big Brother Big Sister of Canada)は独自の正式チャーターを獲得している。1990年代にはカナダはメンタリングのプログラム数や参加者の人口比において世界一となったといわれ、多文化主義に基づく参加当事者の文化の尊重は、オーストラリアやニュージーランドのメンタリング運動に強い影響を与えていることが知られている<sup>2</sup>。

以下では、最近のカナダにおける青少年向けメンタリング運動の政策的妥当性を基礎づける研究成果を概観し、未だメンタリング運動が未成熟な日本の状況への示唆を検討してみたい。

### 2. カナダの青少年向けメンタリング運動とそれを基礎づける研究の概況

#### 1) カナダのメンタリング運動に関する研究の蓄積

最近のカナダの青少年向けメンタリング運動の特徴として、運動推進に向けた多様な学際的研究成果が蓄積され、それがメンタリング運動の政策的妥当性を基礎づけていることがある。2010年代には生涯発達と健康の視点から、貧困の世代間連鎖の阻止を含むメンタリングの効果が社会的投資収益率として提起されている。例えば、2013年に発表された依存症精神健康センター

(Center for Addiction and Mental Health, CAMH) と BBBSC が協働した約 1000 人の青少年を対象とするメンタリングのプログラム評価研究は、メンタリングによって女子が学校で成功する自らの能力への自信を深め、男子がピアの圧力に苛まれる不安やネガティブな行為（いじめや喧嘩、虚言、カンニング、癩癩、激高等）の発生を低減させていることを示している<sup>3</sup>。また、BBBSC の活動に関する実験群・統制群を用いた大規模調査研究が、メンタリング活動への参加は就業率や収入を上昇させ、ボランティア参加率や参加時間、寄付、実際的生活スキル（中等後教育への進学、資産管理能力、組織リーダー）、健康的な生活様式、全般的幸福増進を有意に増大させていることを示し、その社会的投資収益率は 18 倍に達しているという<sup>4</sup>。

BBBSC の冊子「健康へのメンタリングの効果」(2015 年) は、貧困の世代間連鎖の阻止、精神健康、肥満、いじめを健康問題として取り上げ、それら全てにメンタリングが重大な成果を上げているとし、カナダ人全ての生涯にわたる健康を確保するために、脆弱な子どもや青少年向けのメンタリングを行う必要があると述べている<sup>5</sup>。

## 2) MENTOR Canada の設立と三つの報告書

パンデミック直前の 2019 年には BBBSC を中核にアルバータ・メンタリング・パートナーシップ (Alberta Mentoring Partnership) とオンタリオ・メンタリング連合 (Ontario Mentoring Coalition) によって MENTOR Canada が設立された。米国の MENTOR: National Mentoring Partnership から学び、それが実施した青少年向けメンタリングに関する一連の研究<sup>6</sup>に触発された MENTOR Canada は、Social Research and Demonstration Corporation (SRDC) と共に、The State of Mentoring Research Initiative を開始し、2021 年にカナダの青少年向けメンタリングに関する以下の三つの研究報告書を発表している。それらは、青少年を調査対象とする *Mapping the Mentoring Gap* (メンタリング・ギャップの地図を作成する)<sup>7</sup>、大人を調査対象とする *Raising the Profile of Mentoring* (メンタリングのプロフィールを高める)<sup>8</sup>、各地のメンタリング・プログラムを調査対象とする *Capturing the Mentoring Landscape* (メンタリングの風景を捉える) である<sup>9</sup>。以下、若年労働力不足の問題<sup>10</sup>や公教育政策との連関<sup>11</sup>でもその重要性が論じられているカナダの青少年向けメンタリング運動の現状と課題について、これらの三つの報告書を分析していきたい。

## 3. 青少年に関する調査研究：*Mapping the Mentoring Gap*

同調査は 2828 人のカナダの 18～30 歳の青年に 2020 年 1～3 月にオンラインで実施された。対象はカナダの多様な文化構成を反映し、多用なリスク要因（不登校 27%、停退学 18%、家計支援のための労働 18%、落第 17%、フードバンクの利用 16%、補習授業 15%、家族の介護 15%、他家での養護 14%、触法 12%、ホームレス 10%等）を経験している。メンタリングの定義、メンタリングへのアクセスとそれを阻む障壁、メンターから受けた支援、メンタリングの成果、について青年に問うた同調査は、18～30 歳の 19 人の青年への面接調査によって補完されている<sup>12</sup>。

まず、メンタリングとは何を意味するのか、青年によるメンタリングの定義である。それらは、

メンティをその庇護のもとにおいてくれる人、メンティに（援助の）ロープを示してくれる人、メンティの共鳴版として行動する人、メンティの個人的な（personal）旅に参加する人、メンティにとっての役割モデルや参照人（reference figure）となる人、メンティの代理となって関係性やネットワークづくりを行う人、等である<sup>13</sup>。

メンタリングへのアクセスについては、幼少期（6～11歳）に少なくとも一人のメンターがいた青年の割合は39%で、概ね10%がメンタリング・プログラムに参加していた。思春期（12～18歳）には41%に少なくとも一人のメンターが存在し、概ね12%がメンタリング・プログラムに参加していた。思春期にメンターがいた者には平均2.5人のメンターがいた。総じて男女を問わず56%の青年に幼少期と思春期に少なくとも1人のメンターが存在する一方、44%の青年にはメンターがいなかった。メンターがいた青年の16%が幼少期ないしは思春期のどこかの時点でプログラムを介したフォーマルなメンターと出会っていた。また *Raising the Profile of Mentoring*（メンタリングのプロフィールを高める）によれば、30歳代以上の20%に成長期にメンターがいたのに対し、18～29歳で成長期にメンターがいたのは38%となり、若い世代ほどメンターがいた割合が高くなっている。メンターへのアクセスと同様、メンタリングへの認識と理解が進んでいる傾向は、1990年代後半以降のメンタリング・プログラムの普及ならびに政府や民間セクター、学校によるメンタリングへの投資の増大と一致している<sup>14</sup>。

メンタリングへの参加を阻む障壁については、上述のようにカナダの青少年の40%以上がメンターの支援なしに育ち、54%の大人が幼少期ないしは思春期にメンターの支援を望むもそれがかなわなかったと述べているという「メンタリング・ギャップ」の現実がある。少なくとも一つのリスク要因に直面している青年は、リスク要因のない青年の2倍の頻度でメンターによる支援を望むもそれがかなわなかったとされる。メンターの支援を望むもそれがかなわなかった経験をもつ青年の割合は、リスク要因をもつ青年が62%、機能的障がいがある青年が69%、LGBTQ2S+の青年が69%、性転換をした青年が74%、原住民系の青年が61%となっている。メンターへのアクセスを阻む障壁については、「メンターの見つけ方がわからなかった」が55%、「メンタリングとその価値を理解していなかった」が42%、「利用できるメンタリング・プログラムがなかった」が34%、「親や保護者がメンターを持つことに関心がなかった」が20%、「利用可能なプログラムが自分の生活と関係しているようには思われなかった」が19%、「誰も自分のメンターになろうとしてくれなかった」が15%、「同年代の者がメンタリングを軽蔑していた」が12%、「待機名簿に記載されていたが、メンターは現れなかった」が7%、となっている<sup>15</sup>。

メンタリングの関係性がいかに青年を支援しているかについては、青年にとって最も大切なメンターによる支援について、（フォーマルとインフォーマルを含む）全てのメンターと（プログラムを介した）フォーマルなメンターとに分類すると、「一緒にただ楽しくすごした」（54%と47%）、「親や他の大人との関係について話した」（51%と53%）、「自身と友人との関係を話した」（48%と53%）、「学業スキルを学ぶのを助けてくれた」（48%と50%）、「調理や金銭管理等の生活スキルを学ぶのを助けてくれた」（47%と52%）、「新しいキャリアや仕事関連のスキルを学ぶのを助けてくれた」（45%と51%）、「他のサービスや支援に繋ぐのを助けてくれた」（40%と

55%)、「自文化と繋がるのを助けてくれた」(37%と49%)、「地域コミュニティの行事等に一緒に参加した」(36%と47%)となっている。人生の転換期における支援については、「仕事やキャリアへの願望の形成」(39%と31%)、「初職の獲得」(27%と29%)、「職業学校やカレッジ、大学への資金支援の探索応募」(21%と26%)、「新しい学校への適応」(26%と26%)、「在学継続や復学」(29%と26%)、「新しい地域コミュニティへの適応」(23%と25%)、「親や保護者からの独立達成」(28%と22%)、「職業学校やカレッジ、大学への出願」(27%と21%)、「運転免許の取得」(22%と19%)、「親や保護者の家からの引越し」(17%と14%)となり、メンターから受けた影響については、「自身の能力への影響」(73%と64%)、「将来への希望と楽観」(70%と68%)、「誇りや自尊の感覚」(67%と66%)、「よりよい自己認識」(64%と60%)、「人間関係を作る社交スキル」(59%と62%)、「自身の人生の目指す方向を知ること」(58%と61%)、「在学継続への関心」(58%と59%)、「リーダーシップのスキルの発達」(57%と54%)となっている<sup>16</sup>。

メンタリングの成果が何であるかについては、成長期にメンターのいた青年は、メンターのいなかった青年に比べて良好な精神健康にあることが報告されている。メンターのいた青年は53%より多く良好ないしは優れた精神健康と精神的安寧を報告し、成長期にメンターのいた青年の地域コミュニティへの繋がり感覚は2倍以上強く、強い社会関係資本を持っている。メンターのいた青年の高校卒業率はそうでない青年の2倍以上で、95%以上が高校卒業後に継続教育を受け、良好な専門的なキャリア関連の成果を報告している。とりわけフォーマルなメンターがいた青年は、メンターがなかった青年と比較して、良好な・優れた精神健康を報告する割合が3倍となり、強い所属感覚を報告する割合が83%多く、就業や就学の割合は78%多く、自身のキャリア計画に積極的でより良好な精神的安寧を示している<sup>17</sup>。

総じて、半数前後の青年が幼少期・思春期にメンターがいてくれたらと思うもそれが叶わなかったという「メンタリング・ギャップ」を埋めるには、一人の青少年に一人のメンターを配置するのみならず、メンターによる支援を望む全ての青少年のそれぞれの目標に相応しいメンターを、適切な時期に配置できるようにすることが重要であるとされる。同報告書は「子どもや青年がメンタリングの関係性を含む発達支援の関係性にアクセスすることを偶然に放置することはできない」と述べている<sup>18</sup>。

#### 4. 大人に関する調査：*Raising the Profile of Mentoring: Recruiting more Mentors across Canada*

2020年の3500人の大人（平均年齢は47.7歳）に対するオンライン調査である本調査では、青少年向けメンタリングと青少年やカナダの未来におけるその役割に関する大人たちの意見、青少年のメンターとなる大人のプロフィール、参加動機、メンタリングへの関与から得られるもの、参加を阻む障壁、より多くの大人がメンタリングに参加するよう説得できるのは何か、等が問われている<sup>19</sup>。

まずカナダ社会におけるメンタリングの位置づけである。大人の僅か5分の1しか青少年期にメンターと出会っていなかったものの、圧倒的多数が青少年にとってのメンターの重要性を認め

ている。79%の大人がメンタリングの関係性が青少年にとって重要であるとし、メンターとして活動している者や今後5年以内にメンターとなることを考えている者はメンタリングが青少年に決定的に重要な役割を果たしているとしている。メンターがいた回答者の88%が青少年にとってメンタリングの重要性を認め、メンターとなる可能性があるとする91%がメンタリングの関係性を重要としている。約6割の人が青少年のためにより良質のメンターとメンタリング・プログラムが必要であり、約7割の人がより多くのメンターの必要性を認めている。カナダ社会における青少年向けメンタリングの利点については、暴力や反社会的行為の低減(76%)、精神健康の向上(76%)、次世代への健康的関係性の促進(71%)、より強く健康な家族(69%)、国家としてのより強い道徳性と価値(69%)、青年にとって雇用やキャリアへのさらなるアクセスと準備(68%)、学生より高い教育達成(68%)、より強固な地域コミュニティ(67%)、社会階層や人種・民族文化集団を超えるさらなるコミュニケーションと協働(65%)、身体的健康の向上(61%)、友人関係の向上(61%)、不平等の低減(58%)、職場での多様性の増大(55%)、文化の促進と保全(52%)、が掲げられている<sup>20</sup>。

誰がメンターとなっているのか、メンターのプロフィールについては、大人の約3人に一人にメンターの経験がある。8%が現在メンタリングを行い、23%が過去にメンタリングを行った経験がある。メンタリングを行っている大人の48%は成長期にメンターと交流し、大人全体の22%の2倍以上の割合となっている。メンターの学歴や年取については、これからメンタリングを行なう可能性のある大人と比べるといずれも高い<sup>21</sup>。

現メンターとメンタリング経験者がメンタリングを行う理由については、「若者に自身の知識や知恵・経験を伝えたい」(62%と58%)、「自身がメンタリングを行っている若者の具体的な必要があり、自身が援助できると感じた」(62%と59%)、「若人によりよい教育を受けられるよう援助するため」(60%と43%)、「メンタリングは奉仕と育成の自身の価値を反映している」(59%と47%)、「次世代のことを気にかけている」(54%と42%)、「若人と一緒に働くことを楽しんでいる」(54%と48%)、「メンタリングは平等と社会的正義という自身の価値を反映している」(49%と37%)、「地域コミュニティへの返礼ないしは向上」(45%と37%)、「自身の成長期にメンターがいてくれたのでそれを他の人に送っていきたい」(35%と22%)、「メンタリングは自身の信仰を反映している」(30%と21%)、「若人にメンタリングを行うよう頼まれた」(39%と24%)、「若人の親や保護者にメンタリングを行うよう頼まれた」(30%と16%)となっている<sup>22</sup>。

また現メンターとメンタリング経験者のメンタリングから得られる利点については、「恩返しや次世代への投資の感覚」(62%と60%)、「楽しみや幸福、興味深い経験」(60%と54%)、「目的感覚」(59%と54%)、「地域コミュニティや国、世界のより広い展望やよりよい理解」(52%と39%)、「他者や多様性に関するさらなる共感や忍耐」(51%と47%)、「コミュニケーション・スキルの向上」(50%と39%)、「地域コミュニティにおける新しい関係性や所属感覚」(49%と36%)、「自身の理解」(46%と33%)、「自身とは異なる人々や文化にさらされること」(45%と30%)、「キャリアに関連するスキルや利益」(38%と28%)となっている<sup>23</sup>。

一方、現メンターとメンタリング経験者が感知するメンティにとっての利点については、「よ

き役割モデルを持つ」(46%と58%)、「意思決定と問題解決の向上の援助」(43%と52%)、「個人の成長と成功の追求における自己決定の感覚」(43%と47%)、「(家族や同輩集団、恋愛や仕事等の)人間関係に関する挑戦を慎重に対応するよう支援助言」(39%と40%)、「(情緒、尊重敬意、精神健康の)個人的挑戦に慎重に対応するよう支援助言」(38%と46%)、「より多くの若人が中等後教育に入学し卒業するよう激励」(37%と35%)、「健康的な行動の奨励」(37%と49%)、「彼らが誰であるのかを理解するのを助ける誰かからのガイダンスを受ける」(33%と43%)、「道徳と価値のよりよい発達」(32%と43%)、「学習支援(成績向上と高校からの落第防止)」(29%と37%)、「キャリアの向上増進」(28%と27%)、「市民的関与の感覚の発達あるいは良き市民であること」(26%と29%)となっている<sup>24</sup>。

これまでメンタリングを行ったことのない人々にメンターとして活動することへの障壁について尋ねると、時間がない(28%)、自身が若人の必要を支援する準備があるとは思わずそれができるとも思えない(27%)、自身の子どもや家族の世話で忙しすぎる(24%)、関心がなくメンタリングをしたいと思わない(23%)、近所の子どものことを知らずさほど地域コミュニティに関与していない(23%)、メンタリングを地域で行う機会を知らずどのように関与するのかわからない(22%)、自分に何か提供できるものがあるとは思わない(20%)、既にボランティア活動をしており他の大義に(時間とエネルギーを)投入している(13%)、必要があるとは知らなかった(12%)、(交通や経済的)手段がない(12%)、健康上の問題や障がい(10%)、子どもや若人と一緒にいるのを好まない(9%)、青少年向けメンタリングの価値がわからないあるいは理解できない(6%)、となっている<sup>25</sup>。

またメンタリングの経験がない人々も、青少年本人に頼まれれば(51%)、具体的必要がありそれを自分が支援できれば(44%)、親から頼まれれば(39%)、メンタリングを行いたいと述べている<sup>26</sup>。また5年以内にメンタリングに参加する可能性があるとする人々の80%がメンタリングを開始するための支援がインセンティブになると述べ、いかに青少年にメンタリングを行うのか(78%)、メンタリングの価値や効果に関する情報(69%)が参加の動機付けになるとしている。メンタリングへの参加を考えている80%以上の人々が、青少年のための地域の他の資源やプログラムや支援への繋がり、関係性の上昇と下降を制御し困難な会話を慎重に進めるガイダンス、活動のアイデア、メンティの年齢に応じたメンタリングのアプローチやメンティの家族との関係性に関するガイダンス、メンタリングの最新の研究論文や情報へのアクセス、文化的違いを慎重に扱い文化的コンピテンスを強化するためのガイド、等を求めている<sup>27</sup>。

また現メンターがメンティに提供している支援については、単に一緒に楽しんでいる(70%)、生活上のスキルの学習(67%)、友人との関係性について話す(58%)、新しいキャリアや仕事に関連したスキルの学習(58%)、リーダーシップやアドボカシー(擁護・弁護)のスキルの発達(56%)、学業スキルの学習(53%)、親との関係性について話すこと(49%)、市民的関与と感覚の発達(44%)、サービスや地域コミュニティの支援と繋ぐこと(42%)、社会変化の追求(38%)、地域コミュニティの行事や提供と一緒に参加すること(38%)、文化に繋がること(36%)となっている<sup>28</sup>。

また現メンターとメンタリング経験者のメンターとして経験した挑戦については、メンティの家族に厳しく複雑な必要があること（19%と22%）、メンティの親や保護者による支援がないこと（18%と22%）、メンティに厳しい複雑な必要があること（16%と22%）、交流回数やスケジュール（自身に都合のよい時間を見つけること）（16%と13%）、メンティと家族のコミュニケーション（15%と17%）、交流回数やスケジュール（メンティに都合のよい時間を見つけること）（15%と13%）、自身とメンティやその家族との間の価値の相違（14%と15%）、メンティに関与する気がなく反抗的であること（11%と21%）、訓練不足やメンタリングの役割に必要な準備がなされていないと感じること（11%と12%）、メンタリング・プログラム（の事務局）による支援がないこと（11%と13%）、繋がっていないこと（理由は不明で説明不能）（9%と12%）、自身とメンタリング・プログラムとの間の価値の相違（7%と14%）、となっている<sup>29</sup>。

以上、カナダの人々はメンタリングの効果と青少年が大人になる過程における重要性を確信している。人々はメンタリングが地域コミュニティや社会を改善する効果的戦略であるとし、「メンタリング・ギャップ」を埋めるためには、より多くの大人がメンターとなる必要があるという。そのための方策について以下が導かれている。

第一は、メンタリングの経験のある大人はその経験のない大人に比べてメンタリングを継続しまた再開するということである。87%の現メンターは将来別の若人のメンターとなることを考え、35%のメンター経験者が再度メンターとなる可能性があるとして述べている。一方、メンタリング経験のない者の80%は今後5年メンターになることはないとしている。

第二は、メンタリング経験のない大人の相当数が、メンターの必要やメンタリングの価値、地域コミュニティにおけるメンタリングの機会に気づかないままになっており、メンタリングに関する誤解が参加を阻んでいることである。5分の1以上の回答者は自身が若人を支援するために提供できるものや能力があるとは思っていない。大々的な啓発キャンペーンが認知不足との戦いに必要であり、よいメンターになる方途を学ぶ方法を説明することで自身の能力に対する自信のなさを克服できるであろうという。

第三は、メンタリングを行っていない人がメンターとなる切迫した理由は、具体的な必要への対応や若人や親からの直接的依頼である。青少年や保護者が自身の環境においてメンターとなる人を見定める権限を持ち、メンターになってほしいと依頼できる、いわゆる青少年や保護者主導のメンタリングといった新しいアプローチによってより多くの大人がメンターとなる可能性が生まれるという<sup>30</sup>。

## 5. メンタリング・プログラムに関する調査：*Capturing the Mentoring Landscape*

本調査は2020年4～9月に実施されたカナダの150の青少年支援組織に関するオンライン調査である。これらの79%がNPO、64%が公認慈善団体であり、学校や大学、宗教団体によるプログラムも含まれている。プログラム参加者の規模については、小規模（80人以下）が44%、中規模（80～199人）が20%、大規模（200人以上）が36%となっている。多くの団体がメンタリングに加えて、良好な青少年の発達（71%）、自己決定とリーダーシップの発達（54%）、精

神健康（41%）、キャリア準備（40%）等のプログラムを提供している<sup>31</sup>。

メンタリング・プログラムに参加する青少年の多くは具体的挑戦に晒されている。最も一般的な挑戦は貧困と精神健康、学力問題である。メンティの半分以上が貧困状態にあるメンタリング・プログラムは63%、メンティの半数以上が精神健康上の課題があるとするプログラムが46%、メンティの半数以上が学力的に危機的状況にあるとするプログラムが43%となっている。そのためメンタリング・プログラムの対象は一般的な青少年（65%）に加え、貧困家庭の青少年（45%）、精神健康に課題のある青少年（38%）、学力的に危機的状況にある青少年（36%）をプログラムの重点対象目標としている<sup>32</sup>。

メンタリングへの需要は、多数のメンタリング・プログラムの対応能力を超え、54%でメンタリングの待機簿が作成され、待機人数の中央値は40人、待機人数の最大値は800人となっている<sup>33</sup>。

4分の3の組織で100人ないしはそれ以下のメンターが活動し、プログラム毎のメンターの中央値は53人となっている。約10%のプログラムでメンターは報酬補助金を受け、78%のプログラムのメンターはボランティアである。55%の組織で女性のメンターが過半数となっている。交流前の研修については、研修なし（5%）、5時間以上（21%）、3～5時間未満（27%）、2～3時間未満（18%）、1～2時間未満（14%）、1時間以下（4%）となっている。交流開始後の事務局によるモニタリングや支援については、月4回以上（15%）、月2～4回（22%）、月1回（37%）、月1回以下（10%）、なし（1%）となっている<sup>34</sup>。

各メンタリング・プログラムの活動歴については、10年以下が35%（過去5年以内に創設されたものが約25%）、11～20年が26%、20年以上が34%となり、この十数年の間に多くの新たなプログラムが創設されている<sup>35</sup>。

メンタリング・プログラムが掲げる目標については、発達促進的関係性の提供（30%）、全般的な青少年の発達（25%）、キャリアの探索と就業能力（10%）、学業補充（10%）、生活スキル・社交スキルの発達（5%）、いじめ予防（5%）、精神健康と安寧（4%）となっている。メンタリング・プログラムの43%が学校外の発展学習プログラム、35%が学校内の発展学習プログラムであり、キャリア関連（21%）、スポーツ・リクリエーション（17%）、芸術文化（10%）、信仰関連（4%）のプログラムも含まれている。プログラムの類型については、57%が一对一の、22%がグループ、15%が一对一とグループの混合モデル、であった<sup>36</sup>。

プログラムが期待する交流頻度については、1週間に1回以上が6%、毎週1回が66%、月に2～3回が17%、月に1回が6%となり、特に決められていないプログラムも3%あった。期待される継続期間については、3か月以下が17%、3～6か月が7%、7～11ヶ月が24%、12か月が19%、12か月以上が15%、規程のないプログラムが17%であった。メンタリング・プログラムからの早期離脱については、10%以下が42%、10～24%が36%、25～49%が11%、50～75%が2%、75%以上が2%であった<sup>37</sup>。

メンタリング・プログラムを提供する組織が直面している挑戦や課題については、規模（小・中・大）に応じて、プログラムの成長や拡大（20%・20%・21%）、寄付金集めと補助金申請（15%・

24%・26%)、プログラムの持続性(9%・12%・12%)、プログラム評価とデータ収集(9%・8%・7%)となっている。またメンタリング・プログラムの運営上の挑戦課題(トップ2)について、74%がメンターの募集を最大の挑戦課題とし、特に男性メンターの募集が課題となっている。また親や家族の関与、メンターの研修、サービスデザインや提供における文化的展望の統合が課題となっている<sup>38</sup>。

青少年向けメンタリング・プログラムと学校との関係については、メンタリング・プログラムの3分の1以上が学校での発展学習プログラムの内外で展開され、学校が重要なメンタリングの場となっている。学校はインフォーマル、フォーマルなメンタリングの文脈を提供し、学校の教師や職員がインフォーマル、フォーマルなメンターの最も一般的な集団となっている。メンティの22%が最も重要なメンターが学校の教師や職員であると述べている。学校はメンタリングの関係性が発展する理想的な場所であり、青少年が信頼できる安全な接近可能な場所である。学校でのメンタリング・プログラムが学習支援に焦点化することで話題が中立的で恥辱的でないためメンタリングの関係性のよい起点となり、個人的な関係性が育っていくこともある。幾人かの面接で、(特別に抜きんでた、或いは苦しんでいる青少年に向けられたアプローチとは反対の)全員に向けられた普遍的なメンタリング・プログラムがメンタリングの正規化や普遍化を奨励し、メンタリング・プログラムに参加する際に時々生じる不名誉を軽減することができるという<sup>39</sup>。

## 6. メンタリング運動の拡大に向けて

上記をふまえ、MENTOR Canadaは、2021年7月に*The State of Mentoring in Canada: Areas for Action*において、以下の具体的な行動方針を提起している。行動分野①としては、若人の必要に対応できるようメンタリング・プログラムの受入れ容量を拡大させること<sup>40</sup>。行動分野②としては、革新を支援し強化すること。特にe-メンタリングやメンティの社会的繋がり強化拡大に向けたメンタリングの実践、メンティや親がメンターを指名する権限をもつようなアプローチの導入強化の支援<sup>41</sup>。行動分野③としては、青少年がいる場所に青少年のためにメンタリング・プログラムを開設すること。ここでは特に学校やスポーツ等がメンタリングの文脈づくりに重要な役割をはたすと考えられている<sup>42</sup>。行動分野④としては、地域コミュニティにおいてメンタリングの文化を醸成すること<sup>43</sup>。これらを実現するために、政治家や慈善事業家、サービス提供者、学校や教育セクター、研究者、私的セクター、気遣う大人たちや地域コミュニティ、メンターがそれぞれ具体的に何を行うべきか、詳細な行動指針が示されている<sup>44</sup>。

MENTOR Canada自身は、カナダの各地の青少年向けメンタリング運動の展開を支援するために、「メンタリング月間」(Mentoring Month)や「メンタリングの力」(Power of Mentoring)の行事、オンラインのメンター向けオリエンテーションを実施している。さらにMENTOR Connectorやe-メンタリングプラットフォームを提供し、自身のホームページのMentoring Knowledge Hubでメンタリング・プログラムの実践に必要な研究知見を提供している。また、The Canadian Centre for Mentoring Researchの創設パートナーとしてメンタリングに関する革新的実証研究を実施し、青少年向けメンタリング・プログラムの研究と実践を繋いでいる<sup>45</sup>。

MENTOR Canada は、プログラムの実践の各段階の在り方に関する詳細な研究レビュー<sup>46</sup>を行うと共に、青少年中心主義に立脚したメンタリング運動の拡大にむけた戦略を練っている<sup>47</sup>。

## 7. おわりに

以上、カナダの青少年向けメンタリング運動の拡大に向けた動向について、MENTOR Canada の三つの報告書を検討してきた。これらの報告書には、米国の MENTOR: National Mentoring Partnership に学びつつ、メンタリング・プログラムの実践に必要な研究を行い、それをさらに社会運動として拡張していこうとしている次世代への願いが凝縮されている。今日のカナダの青少年向けメンタリング運動の特徴について、以下が特筆される。

第一は、メンタリングの実践と研究が連関して、理論的実証的研究に基礎づけられた実践がなされる一方、実践から提起された課題を研究が解決に向けて探っている。研究が生み出す科学的知見によって実践は間違いのない、よりよい実践に向けた改訂を試みている。例えば、メンターの需給状況の把握と共に、現状打開のための可能性（例えば、頼まれれば、課題が明確で自身に何かできるのであれば等）を具体的に問うている。またメンティの要請に応えるための批判的メンタリングの要素を組み入れた青少年中心主義を実践に組み込む提言や、汚名の除去のための学校でのメンタリングの普遍化の可能性にも言及している。他国の研究成果を学び、精査し、それらを自国のプログラムの実践に無理のない形で生かしている。

第二は、カナダのメンタリング研究そのものが、米国等の各国での研究知見や実践を学びつつ、生涯にわたる健康な発達を実現する方途としてメンタリングをとらえ、社会全般に関する公共政策としての社会的投資収益率に関するマクロな視点の研究と各プログラムの実践に関するプログラム評価を精査することで、メンタリングの重要性をゆるぎないものとして社会運動に転換している。本稿で概括した定量的調査研究にあっても、それを補う定性的面接調査を丁寧に実施し、重層的で体系的なメンタリング研究が社会運動の政策的妥当性を支えている。

第三は、メンタリングについて、インフォーマルなメンタリングとフォーマルなメンタリングの双方の特徴を精査し、プログラム化の利点をとらえていることがある。学校は生涯発達の視点からはメンタリングのよき機会ととらえられ、カナダの不足が懸念される若年労働力からもその重要性が説かれている。「教育を超えるメンタリング」と称されるように、教育とメンタリングは生涯発達の視点から、一つの世代を超えた多世代から構成される多層的な円環的視点からとらえなおされねばならない。必要なメンターを必要な時に提供出来る様な体制を学校が整えられるような地域コミュニティの中核としての学校の構想等、従来の学校化社会を超える可能性を具体的に提起している。

以上のカナダにおける多層的な豊かな研究の蓄積は、日本の未成熟な青少年向けメンタリング運動とそれを支える研究の必要性に多くの示唆を与えている。多世代の円環的生涯発達支援のためのプログラム実践とそれを支える研究の確かで豊かな往還が求められている。

- 
- 1 Preston, J.M. et al., Mentoring in Context: A Comparative Study of Youth Mentoring Programs in the United States and Continental Europe, *Youth & Society*, 51-7, 2019. を参照。
  - 2 拙稿「カナダにおけるメンタリング運動の概況：1990年代の青少年問題とBBBSC」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－』第34号2009年。
  - 3 DeWit, D. & Lipman, E., et al., *Mentoring Relationships And the Well-being of Canadian Youth: An Examination of Big Brothers Big Sisters Community Match Programs*, CAMH, 2013.
  - 4 The Boston Consulting Group, *BBBS Social Return on Investment Study, Discussion Document*, Big Brothers Big Sisters of Canada, 2013.
  - 5 Big Brother Big Sister, Ca., *The Mentoring Effect on Health*, 2015.
  - 6 拙稿「米国の青少年向けメンタリング運動の動向：MENTORによる三つの報告書（2014～2018）の検討から」『愛知淑徳大学論集－文学部篇一』第44号2019年。
  - 7 Church-Duplessis, V. etc., *Mapping the Mentoring Gap Report The State of Mentoring in Canada*, MENTOR Canada, May 2021.
  - 8 Church-Duplessis, V. etc., *Raising the Profile of Mentoring: Recruiting more Mentors across Canada Report The State of Mentoring in Canada*, May 2021.
  - 9 Church-Duplessis, *Capturing the Mentoring Landscape Report The State of Mentoring in Canada*, May 2021.
  - 10 Canadian Council for Youth Prosperity, *Youth Labour Shortages in Canada: Essay Contributions from the Youth Ecosystem*, April 2022.
  - 11 People for Education, The Students Commission, *The Future of Public Education in Canada, A #CanadaWeWant Theme*, 2020.
  - 12 *Mapping the Mentoring Gap Report The State of Mentoring in Canada*, op. cit., p. 5.
  - 13 Ibid., p. 7.
  - 14 Ibid., pp. 9-10.
  - 15 Ibid., pp. 11-13.
  - 16 Ibid., pp. 14-18.
  - 17 Ibid., p. 19.
  - 18 Ibid., p. 20.
  - 19 *Raising the Profile of Mentoring: Recruiting more Mentors across Canada Report The State of Mentoring in Canada*, op. cit., p. 5.
  - 20 Ibid., pp. 6-7.
  - 21 Ibid., pp. 8-9.

- 22 Ibid., pp. 9-10.
- 23 Ibid., pp. 10-11.
- 24 Ibid., p. 12.
- 25 Ibid., p. 14.
- 26 Ibid., p. 15.
- 27 Ibid., p. 17.
- 28 Ibid., p. 19.
- 29 Ibid., p. 20.
- 30 Ibid., p. 22.
- 31 *Capturing the Mentoring Landscape Report The State of Mentoring in Canada*, op. cit., p. 5.
- 32 Ibid., pp. 7-8.
- 33 Ibid., p. 8.
- 34 Ibid., p. 9.
- 35 Ibid., p. 10.
- 36 Ibid., p. 11.
- 37 Ibid., p. 12.
- 38 Ibid., p. 14.
- 39 Ibid., p. 16.
- 40 MENTOR Canada, *The State of Mentoring in Canada Areas for Action*, July 2021, pp. 3-4.
- 41 Ibid., pp. 4-6.
- 42 Ibid., p. 6.
- 43 Ibid., pp. 6-7.
- 44 Ibid., pp. 7-9.
- 45 Ibid., pp. 9-10.
- 46 MENTOR Canada, *Youth Mentoring: Research on Program Practices, A Review of the Literature*, 2021.
- 47 MENTOR Canada, *Building a Mentoring Movement in Canada*, Conference Report April, 2021.

(本研究は、JSPS 科研費 18K02294 の成果の一部である)